

クルト・ケプルナー著
『戦争の国への旅—ユーゴスラビアでの一外国人の体験』
抄訳（5）

元 吉 瑞 枝

☆原著は次の通りである。

Kurt Köpruner: *Reisen in das Land der Kriege*
— *Erlebnisse eines Fremden in Jugoslawien* —
Überarbeitete Neuausgabe: Diederichs im Heinrich Hugendubel Verlag,
Kreuzlingen/München 2003.

☆本書の構成（目次）

原著の概要については、抄訳（1）（『熊本県立大学文学部紀要』第10巻第2号所収）において、目次概観を示したところであるが、ここで、各ブロックに含まれる小見出しもすべて掲げて、その全容を改めて示しておきたい。

< I > 世界警察 —1900、1999

- ★本書はどのようにして成立したか
- ★チトー、チトー、チトー

< II > クロアチアでの戦争—1991年から1995年まで—

- ★戦争前の数ヶ月
 - *スネジャナ *何かが起こりそうな気配
 - *「民族自決権」—1991年のキーワード
 - *ユーゴスラビア連邦大統領の選挙 *ドイツ語圏の国々の態度
- ★嵐の徴候
 - *「レッドスター・ベオグラード」 *クライナ地方を通して
 - *ヨシプーあるいは「奴らは神に戦争が起こるよう祈っている」
 - *ツーパーーあるいは「ダルマチアの水晶の夜」
 - *マリアーあるいは「窓辺の蠟燭」

- *メディアと選挙—あるいは「我々はセルビア人の血が飛び散るのを見たい」
- *アリフ—あるいは、クロアチアに住む或るムスリムの足跡
- *「クロアチア軍はボスニアでは戦争していない」
- ★「ブリヤトノ」あるいは或る言葉の誕生
 - *人種についての小論—あるいは、99.9%クロアチア系なのにセルビア人
 - *「クロアチア派」—「フォアールベルク派」
- ★ 地図の塗り替え
 - *スロベニア—あるいは「誰が誰を撃ったのか」
 - *ドイツの転換—あるいは「セルビア人たちのテロ」
 - *夜中の爆音 *世捨て人、ミルコの許で
 - *ロマンとニナー—あるいは「なんなら、そいつを明晩ぶっ飛ばしてやるぜ」
 - *「ドン、終わり！」 *スネジャナとの別れ
 - *ドイツでの新たなスタート
- ★付論：歴史への問い
 - *「歴史」とはいったい何なのか
 - *オイゲン公、トルコ人、セルビア人
 - *ユーゴスラビアの誕生 *太古の現象 *ウスタシャ
 - *パルチザン *チトーの残虐行為 *チトーのユーゴスラビア
 - *チトーの民族政策 *共産主義者同盟の終わり *最初の自由選挙
- ★ツジマン、新生クロアチアの父
 - *ウスタシャ・ルネサンス
 - *ウスタシャ・ルネサンスに対してドイツとオーストリアはいかに反応したか
 - *クロアチアに住むセルビア人の反応
- ★全戦線での戦争
 - *戦争報道 *HOS（クロアチア防衛同盟）とその傭兵たち
 - *欧州共同体内の抗争が明白に
 - *首相と大臣に宛てた、無駄に終わった手紙
 - *或る比較：ドイツ—バイエルン—ニーダーバイエルン
 - *ミロシェビッチとツジマン *国連の介入
 - *ドイツが一步踏み出す
- ★クロアチアの冬
 - *地下壕のいとしい隣人たち *ゲンシャーの平和 *無力な国連
 - *ナショナリズムの陶酔のあとの重い二日酔い

<Ⅲ> ボスニアでの戦争—1992年から1995年まで—

★連鎖反応の進行

- *多文化のボスニアという神話 *各人が各人の敵に
- *戦争の経過 *ボスニアでの国連 *大量虐殺の政治（1）
- *デイトン
- *「ジャーナリズム」—あるいは9歳のエディンの幸福と不幸

★ボスニアの戦争のあとで

- *汚職事件のなかの或る教訓劇
- *「言葉は一語たりと信じてはいけない！」

★戦争を構成するものについての注釈（1）

- *ルーダー・フィン—あるいは、訂正は無価値である
- *「セルビア人はモンスターだ」
- *「私のチーフが何を望んでいるか、私にはわかっている」

★20世紀末のボスニア

- *「兄弟愛」 *エルギナ *イヴォ・アンドリッチの生地
- *二人の若いムスリムが天国と地獄について語る
- *1999年のマーシャルプラン *ドイツ大使館での体験
- *鼻持ちならないショー
- *意味のない電話番号およびシュレーダーとフィッシャー宛ての手紙
- *多文化のメッカ、サラエヴォで *ヤスミンカとイゴール

★「悪の新帝国」へ向かう道中で

- *オロヴォとクラダニ *ボスニア・セルビア共和国で

<Ⅳ> セルビアでの戦争—1998年から1999年まで—

★「コソボ」問題

- *コソボにおける多数派の比率 *チトーの死後、状況が先鋭化
- *ミロシェビッチの登場 *コソボの自治の廃止に向って
- *「コソヴァ」の独立宣言 *U C K（コソボ解放軍）
- *勝利あるいは「瓦礫の山」

★N A T O空爆前の数ヶ月

- *1998年の内戦
- *ホルブルック合意とO S Z E（全欧安保協力機構）の使節

★戦争を構成するものについての注釈（2）

- *ベオグラードへの爆撃—あるいは、鳩が鷹へ突然変異

- * ラチャクーあるいは、大量虐殺の政治 (2)
- * 「ランブイエ」ー開戦のための和平会議
- ★NATOによる空爆
 - * クリーンなハイテク戦か爆弾テロか? * 空爆開始後の最初の数ヶ月
 - * 同盟者についての新たな認識
- ★NATO空爆後の冬のセルビア
 - * ミュンヘンの領事館で * 死の恐怖と偏見
 - * 最初の「インタビュー」 * スレムスカ ミトロヴィツァにて
 - * 空爆5ヶ月後、ミロシェビッチ失脚1年前のベオグラード
 - * セルビア人とミロシェビッチ
 - * ツレンヤニンやキキングや他の人たちとの出会い * ドウシャン
 - * 42日目 * インタビューに応じて * 空爆見物
- ★霧が晴れたが視界不良
 - * 誰がいつ誰から何故逃げたのか
 - * 誰が、あるいは、何が誰を殺したのか
- ★ジェノサイド?ーあるいは、難民はノーだが爆撃はOK
 - * ドイツ政府は、ジェノサイドがあったという前提から事を始めたのか
 - * ドイツ外務省の状況報告
 - * NATOは軍事介入の権限を有していたのか
- <V> コソボで旅行者としてー2000年10月ー
 - * 旅行者としてコソボに入るには、どうしたらいいのか
 - * オラホヴァツへの走行 * ハイディ
 - * 「あれ以来私はくたばっている」
 - * 欧州安保協力機構の建物で * 内戦と爆撃の時代について
 - * ベチ * デチャニ
- ★セルビア人のゲッターで
 - * ツイツァ * 「私たちは苦悩を共にしたのだ」
 - * 「私たちはアルバニア人に対して何をしたのか」
 - * 嘘で塗り固めた話のなかの虫けら * クラグェヴァツの子供たち
- ★10年を経た末に

☆本稿について

本稿（『戦争の国への旅—ユーゴスラビアでの一外国人の体験』抄訳）の既刊、抄訳（1）～（4）（本誌第10巻～第13巻）においては、上記の「<Ⅰ>世界警察」および「<Ⅱ>クロアチアでの戦争」を扱い、その内容を全訳または大意によって紹介した。但し、<Ⅱ>の後部「★全戦線での戦争 *欧州共同体内の抗争が明白に」から先の部分が残っているので、本号ではその部分（原著115頁～131頁）について大意（一部、全訳）を示したのち、<Ⅲ><Ⅳ>を紙数の関係で割愛して、「<Ⅴ> コソボで一旅行者として」を、本号および次号でできる限り全訳したい。本号では、<Ⅴ>の前半（293頁～304頁）について全訳を掲げておく。

oo

～<Ⅱ>クロアチアでの戦争 —1991年から1995年まで～

★全戦線での戦争 （前号よりつづく）

>> *「欧州共同体内の抗争が明白に」～ *「ドイツが一步を踏み出す」まで << [大意]

[1991年8月半ばにドイツのコール首相は、(スロベニアとクロアチアにおける) 戦闘が中止されなければ、EC[ドイツ語ではEG、欧州共同体、EUの前身]はクロアチアとスロベニアの独立を承認しなければならない、それだけが戦闘をやめさせることができると発言したが、EC諸国はそれに異を唱え、91年の秋以降、EC内部で多少とも公然とした対立が生じた。ドイツ語圏のメディアでは、スロベニアとクロアチアの独立を煽るような論調が盛んになった。

当時、私（＝著者。以下、同様）は、知人のジャーナリストを通して、ドイツやオーストリアの政府要人（コール首相やゲンシャー外相、ヴラニツキー首相やモック外相等）に公開書簡を出し、それを『シュピーゲル』や『シュテルン』等、無数のメディアにも送り、その中で、政府の政策の矛盾点に触れ、スロベニアとクロアチアの独立承認が所与の状況のなかでは問題を大きくするばかりであることを指摘した。

しかし、ドイツ語圏の世論にとっては、特にクロアチアでの戦闘が勃発してからは、クロアチアを民主的で西側志向の善の側に、セルビアを共産主義

的で暴力的な悪の側に位置づける図式ができあがっていた。このような峻別は、誰にでもたやすく見分けられる現実の出来事とも相容れないものであり、また、他の西側諸国の判断とも対立するものだったが、それに対する批判は、知識人からもほとんどなかった。

いずれにせよ、このような善悪の図式は、歴史的な論拠もなく、また法律のあるいは人道的な根拠も全然ないものであること、また、このような場合には第三者の不介入がいかに必要であるかということは、仮に、バイエルンがドイツから独立しようとして一方的に独立を宣言して内戦になり、他国がそれに干渉した場合に起こりえる事態を想定してみても、また、イギリスとスコットランドや他の任意の地域について考えてみても明らかである。

ところでこの時期、セルビアのミロシェビッチ大統領とクロアチアのツジマン大統領とのあいだで数回の秘密会談がもたれ、ユーゴスラビア内のかつての境界線の見直しがなされようとしていたとの報道がしばしば伝えられた。両人が実際に会って密談をしていたのか否かはともかく、両者のあいだには或る合意があったようにみえる。すなわち、セルビアは、スラボニアとボスニアの数箇所を手に入れ、クロアチアは、クロアチア人が多数居住する西ヘルツェゴビナとクライナ⁽¹⁾を手に入れるというものである。このうち、クライナ地方は、おそらく両者のあいだで問題が生じた唯一の地だった。クロアチアにとっては、地図を見ればすぐにわかるように、クライナがなかったら実質的に二つに分断され、ほとんど生き残れる可能性をなくしてしまうも同然だった。他方、クライナに住むセルビア人のリーダーたち⁽²⁾も決して侮れない相手であり、ミロシェビッチでさえ、彼らには手こずっているようにみえた。しかし、それを除けば、将来の国の分け方に関して、両者のあいだには深刻な対立がなかったので、最終的な境界線についてすでに形をとりつつある交渉において、両者ともにできるだけ有利な前提を戦場で作り出そうとしたのである。

また、この時期のミロシェビッチの政治を特徴づけるものとして、交渉を、ECのレベルから国連のレベルへ移そうと努めたことがある。ECでは、あからさまに反セルビアの立場をとっていたドイツの力があまりにも強かったのに対して、チトー時代のユーゴスラヴィアと長いあいだ良好な関係にあった非同盟諸国が多く議席や発言権を持っている国連に、ミロシェビッチは信をおいていた。しかし、彼はまた、アメリカをも信じて疑わなかった。なぜならベーカー國務長官がスロベニアでの戦闘直前の1991年6月にもまだベオグラードにいて、ユーゴスラビアの国家維持に賛成すると表明していたか

らである。

ミロシェビッチのこの点での努力は実を結んだ。すでに EC の全権大使として1991年9月以降キャリントン卿が配置されていたが、国連は、同年11月にサイラス・ヴァンス前アメリカ国務長官を独自の仲介者として指名した。それは、東スラボニアの都市ヴコヴァルをめぐる戦闘が極限に達した時期に行われた。ヴコヴァルでは、まずクロアチア人の暴動が起こり、その後セルビア側による爆撃が数週間続いたあとで街は完全に破壊され、最後にはセルビア側によって征服された。ヴァンスとキャリントンは、大きな責務をもって、その地域に国連部隊を駐屯させることへの同意を引き出そうと骨折った。

ツジマンはこの時期、極度に困難な状況に置かれていた。彼は、ヴコヴァルの件で激しい批判に曝されていただけでなく、亡命クロアチア人や西ヘルツェゴヴィナのラジカルなクロアチア人から常に駆り立てられていたと同時に、同盟者であるドイツからも、一年前に決定した、極端な少数者排除の憲法に対してノーをつきつけられ、91年12月初めに新しい憲法を制定したところだった。それはうわべだけ修正したものにすぎなかったが、少なくとも、何かがなされたかのように装うことはできた。

それは、ドイツが決定的な一歩を踏み出した局面とほぼ一致していた。1991年12月12日、すでにメディアや野党から激しく迫られていたコール首相は、ドイツは、クリスマス前に、他の EC 諸国の同意がなくても、スロベニアとクロアチアの独立を承認する、と宣言した。このような単独行動は、ドイツの世論からは圧倒的に支持されたが、他の EC 諸国にとっては、みずからの存在が否認されたも同然だった。なぜなら、これまで多くの会議で、EC は独立承認にあたっては必ず共同の歩調をとることで合意していたからである。しかし、コール発言の三日後に開催された EC の外相会議では、決裂するだろうとの予想とは異なり、ドイツの主張が通った。ドイツは、ゲンシャー外相のさまざまな交渉手腕と併せて、おそらく同じ時に進められていたマーストリヒト条約⁽³⁾締結のための交渉で、スロベニアとクロアチアの独立承認を、ドイツがいくつかの譲歩を受け入れるための条件としたのではないかと思われるふしがある。ゲンシャーは、回想録のなかでも、スロベニアとクロアチアの独立承認⁽⁴⁾によってようやく戦闘が終わったと厚顔無恥にも書いている。

しかし、この時点でのスロベニアとクロアチアの独立の承認は、その後のユーゴスラビア情勢の展開にとって破壊的であり、文字通り致命的だった。ユーゴスラビアの崩壊⁽⁵⁾がそれで確定したからということではなく — ユー

ゴスラビアの崩壊は遅くともスロベニア戦争以降、もはや止めようがなくなっていた一、おそらく、その崩壊から生じるであろう諸問題の解決をきわめて難しいものにしたからである。その後の内戦が、その必然的な結果である。]

★クロアチアの冬 [全訳]

だが、マーストリヒトでの決議の最初の結果は一超短期的に見れば一ポジティブなものだった。独立を手中に収めたツジマンは、1992年初頭に、セルビアによって占拠された地域での国連保護軍の駐屯に同意した。ミロシェビッチはすでにその1ヶ月前に、ゴーサインを出していた。セルビアがこれらの地域をもう決して明け渡すことはないだろうとのツジマンの憂慮は追い払われた。なぜならクロアチアの国境は、国際的な承認によって国際法により保護されたからである。

それと共に、実際に平穏な状態が一時的に訪れた。戦闘は弱まり、12500名の国連軍兵士は陣地を離れ、移動した。これが、ゲンシャーが語っていた事態である。彼は、クロアチアでの戦争は、独立の承認によって初めて終わらせることができると言明したのである。しかし、これは、その後の歴史を知っている者から見れば、注意すべき見解である。これから私は、その歴史を手短かに語ろうと思う。

* 地下壕のいとしい隣人たち [全訳]

戦闘の小康状態は、長くは続かなかった。そのことは、新たに私の家族の一員となった子供たち⁽⁶⁾の次のようなエピソードからもいえる。

1992年、ザダールがある程度静穏になったあと、復活祭の休暇中にアテナとペロは、故郷の彼らの父を訪ねようと思い、それを実行した。すぐに、それが重大な失敗だとわかった。というのは、彼らがザダールに着くか着かないうちに、街にはまたも榴弾が飛び交うようになったからである。アテナはすぐに機会をとらえてドイツへ帰ったが、当時十歳だったペロは、とりあえず父のところに留まった。

その後そこで起こったことについて、ペロは生涯忘れないだろう。何年ものあいだ、彼はそれを誰にも、母にさえも話さなかった。ようやく八年後に、彼は私に次のような話をしてくれた。当時、彼は数週間、大通りに面した六階の部屋に終日一人でいた。父親は仕事に出かけねばならず、息子に、爆撃

の警報が鳴ったら浴室の床に寝そべるように、それがまだしも一番安全な方法だから、と警告することしかできなかった。そして実際、毎日、警報が鳴った。

或る朝、ちょうどサイレンが鳴ったとき、ペロのところに隣の少年が来ていた。少年は飛び上がり、ペロも一緒に地下室へ来るようにと呼びかけた。ペロはちょっとためらったが、父の忠告に反してそうした。ザダールのこのような集合住宅には、ユーゴのほかの地域でもそうであるように、原爆等から避難するための巨大な防空壕が地下にあった。それは、外部の敵から身を守るためにチトーがとった多くの措置の一つであった。ペロはこれまで、そこに入ったこともなく、そのときもほんの数分いただけだった。

というのも、その防空壕のなかの簡易ベッドで横になっていた人々の幾人かが、ペロがセルビア人だと気づき、彼に向かって、消えろ！ここはお前なんかの来るところではない！と喚いたからである。彼らは怒り狂ったように、ペロを殴ったり突きまわしたりしたあげく、一人が足を出してペロをつまづかせた。ペロは転び、鼻を床にぶつけた。そして、なかば意識が戻るや否や、彼は一目散にその場から逃げ、六階の住まいに戻り、浴室の床に横たわった。そこに一人でいる方が、隣人たちと一緒にいるよりはよかった。彼らは皆、彼のことを彼が生まれたときからとてもよく知っていた人たちばかりだったので…

彼は当時、セルビアとクロアチアのあいだで何が問題になっていたのか何もわかっていなかったし、まして彼の父のネナートは、すでに言及したように⁽⁷⁾、カトリックの洗礼を受けており、半分イタリア人だった。隣人たちの攻撃の原因は、次のようなことだった。ペロの祖父にあたるネナートの父は、かつて有名なセルビア系クロアチア人の政治家で、その地域全体で高い声望を得、クロアチア人からもセルビア人からも文字通り愛されていた。それについては、感動的なエピソードがいろいろある。しかし、「クロアチアの秋⁽⁸⁾」には、それはもう人々の関心を引かなくなっていた。その後ペロの父が数人の熱狂的な民族主義者から敵視されて、もっぱら「セルビア人」として非難されるようになったとき、彼は誇らしげな反抗心をもって、「よからう。それなら私はセルビア人だ」と応じたのだった。

>>*「ゲンシャーの平和」~*「ナショナリズムの陶醉のあとの重い二日酔い」<< [大意]

[四六時中、このような状態が続いた。クロアチアは、クライナなどの国連

保護地域に平和が戻ってきてセルビア人が居座るのを阻止しようとし、他方、セルビア人は「クライナ共和国」にみずからの管理機構を設置してその安定化をめざし、紙幣さえ発行した。これに対して、クロアチアは周期的に大小の攻撃を始めた。これは、ヴァンスとキャリントンによって取り決められた協定に違反するものとして、国連から厳しく批判されたが、誰もそれを真剣に受けとめなかった。セルビア人の方も、ミロシェビッチが署名したこの協定に違反して、武器を国連に明け渡さず、クロアチアの攻撃に反撃し、クロアチアの多くの都市を無差別に爆撃した。その中にはザダルも含まれていた。

スロベニアとクロアチアの独立承認によって得た平和とはこのようなものだったのである。こんな状態は三年以上も続いた。クロアチアは、占領された地域を奪還しようとして、国連部隊が撤退する期限を何度も最後通告的につきつけたが、通告は常に期限切れとなって終わった。しかし、その期間をクロアチアは、強固な軍備拡張のために充てた。すでに1991年の秋から課されていた国連による武器禁輸については、誰もが一笑に付して問題にもしていなかった。

そして1995年の春、ついにクロアチアの部隊が西スラボニアの国連保護地域に侵攻するという事態に至った。ツジマンとミロシェビッチのあいだで休戦協定が結ばれていたように、セルビア側はほとんど防戦せず、国連兵士はただ傍観しており、クロアチア側の大勝利に終わった。銘記しておかなければならないのは、西スラボニアは、その後セルビア側による怖ろしい大量虐殺の舞台となったことで知られた東ボスニアのスレブレニツァと同様、国連保護地域だったということである。

その数ヵ月後の1995年8月初頭、スレブレニツァ⁽⁹⁾の陥落後まもなく、やはり国連保護地域だったクライナでも、「嵐」作戦と呼ばれたクロアチアの攻撃が決行され、数日で広いクライナ地方全土がクロアチアによって制圧された。このときもセルビア側からの反撃はほとんどなく、大多数の者は大急ぎで逃走した。残った少数の者たちは主に老人と病人だったが、クロアチアの特殊部隊に引き渡され、多くは殺害された。赤十字の発表によれば、クライナで1000人以上のセルビア人（民間人）の死者が出た。また、作戦の数日後、家屋の70%が、セルビア人がクライナに再び戻ってくることができないように破壊された。

クライナから脱出したセルビア人の数は、データでは、20万人から30万人のあいだである。これら難民の救いのない行軍の様子や、彼らの縦列に向かっ

て石を投げたりミグ戦闘機から機関銃を撃ち込んだりする様子は、西側メディアでは、あまり大きくは取り上げられなかった。このような攻撃にも生き延びられた場合、彼らは主にバニャルーカやベオグラードやボイボディアへ逃れたが、一部はコソボへも向かった。しかし、コソボへ行った人たちは、きわめて短期間しか庇護を得られなかった。コソボでは、すでにずっと前から、アルバニア人のためのコソボを主張しているUCK [英語名KLA、コソボ解放軍]¹⁰⁾の力が大きくなっており、彼らにとっては、そこへ新たにセルビア人が加わるなど、論外のことだった。UCKの最初の攻撃は、クライナから新たにやってきたセルビア人の難民に向けられたものであり、これによって、このグループは広く名前を知られるようになったのである。

クロアチアは、西スラボニアとクライナの征服によってほぼ目標に達したが、ただ東スラボニアの一部が依然としてセルビア人に支配されたままだった。当地も国連の保護下に置かれていたが、ここでも一気に軍事的に解決するようにと、ツジマン大統領は過激な民族主義者たちからプレッシャーをかけられていた。国連はそのような軍事力の行使を認めようとはしなかったが、当地でもミロシェビッチに見捨てられたと感じていたセルビア人が自発的に降伏した。そして1996年初頭のこのとき、ついにクロアチアの黄金時代が始まったのである。

しかし、ツジマン大統領が病床に臥し、瀕死の状態にあった1999年の末、クロアチアでは腐敗が蔓延して国家財政は破綻し、企業は疲弊して国民総生産高は後退して失業者は多く、賃金は低くて物価は法外に高く、人々のあいだには重苦しい空気が漂っていた。また、かつて西欧的で民主的と高く評価されていた国のイメージも地に落ち、一言で言えば、「クロアチアの冬」の時代になっていた。

1999年12月11日、ツジマン大統領の死が発表された。ニューヨークタイムズの記者デイヴィッド・ビンダーは、追悼文のなかで、ツジマンのナショナリズム、大クロアチアについての夢、ボスニアのムスリムへの嫌悪、ホロコーストを否定した修正主義、クロアチアに住むセルビア人への差別、権威主義的な統率スタイルと個人崇拜などを挙げ、「ツジマンは、チトーの悪徳はすべて具えているが、チトーの徳はただの一つも持っていない」と書いている。それは、ドイツが、そしてその後は西側諸国全体が決定的な局面においてクロアチアに与えてきた巨大な援助に対する容赦ない総括ともいえる注目すべき記事である。

2000年1月3日にクロアチア議会の選挙が行われたが、その用紙は、「真

性のクロアチア人」のためのものとそれ以外のもの（「セルビア人」のもの）とに分類されていた。しかしこの選挙では、ツジマンの党は惨敗し、九年前に最後の全ユーゴスラビアの国家元首だったステイベ・メーシチ⁽¹¹⁾が大統領に選ばれた。彼の政府は奮闘したが、あまりに重い負の遺産を負っており、速やかな改善への希望はほとんどなかった。ナショナリズムの陶醉は、重苦しい二日酔いに席を譲ったのである。

避難したクライナのセルビア人たちは、その後どうなったのか。西側のメディアでは、繰り返し、成功した帰還について報告されていた。私（＝著者）は一度自分の目で確かめてみようと思い、2001年5月末、当地を訪れた。かつてのセルビア人多数地域だった地帯は、完全に破壊されたゴースタウンと化し、避難していた人たちのごく一部のみが帰ってきていた。それは主に老人たちであり、彼らは、廃墟と化したかつての故郷で、極貧のなかに暮らしていた。多くの小さな村の中を通ったが、仕事場も学校も病院も公共の交通もなく、内部が焼け落ちて骨組みだけが残った家々のあいだには、ほとんど何も動くものは見当たらなかった。OSZE（全欧州安保協力機構）や他の救援組織の個々の熱意ある人たちの存在を別にすれば、「世界はクライナのセルビア人たちのことを忘れてしまったのだ」という結論に達しざるを得ない。]

～ <Ⅲ> ボスニアでの戦争 -1992年から1995年まで- ～ (略)

～ <Ⅳ> セルビアでの戦争 -1998年から1999年まで- ～ (略)

～ <Ⅴ> コソボで旅行者として -2000年10月- ～ [以下、全訳]

ベオグラードのオーストリア大使館で、私がコソボへの旅行を申請すると、「それじゃ、あなたは、それが危険なものになるかどうか知りたいというわけですね?」と、グラーツ出身の大使館の女性が尋ねた。2000年5月に突然起こったミロシェビッチの失脚⁽¹²⁾以来、私は、もう一度このユーゴスラビアの首都を訪ねて、当地の友人や知人たちの現在の心境を知り、そのあとでできれば、いよいよコソボへも行くことを試みたいという気持ちにせきたてられたのだった。

ここ数ヶ月間、当地についての報道は、これまでと比較すると非常に少なくなり、殺人や放火についてももうあまり話題にならず、セルビア人やロマの脱出もおおかた終わったように見え、共同墓地の捜索に関心を抱いている

者はもう誰もいないように見えた。ヨシュカ・フィッシャーは、もう半年も前に、コソボでの成り行きに満足できると確言していた。その上、コソボでは、いくつかの選挙が控えており、もうずっと前からいなくなっただと思われていた以前のコソボ大統領イブラヒム・ルゴバ⁽¹³⁾がカムバックすることが見込まれているようだった。

*旅行者としてコソボに入るには、どうしたらいいのか

しかし、どのようにして旅行者としてコソボへ行けるのか、またそもそもそれが可能なのかについて、旅行前にドイツから電話で尋ねたときも、ベオグラードにおいても、私が尋ねた人の誰も答えることはできなかった。ミチャは言った。「正教の僧侶が何度もそちらへ行っていることは知っているのだが…彼らは、KFOR [NATO主体のコソボ平和履行部隊] の兵士に護衛されて行っている。独力で？ 旅行者としてだって？ だめだよ、そんなことはできない。(用事もなく) ただ単にそこへ行ったというような人は誰も知らない。その場合は、ウィーンから飛行機で行かなくてはいけないだろう。しかし、車で、しかも記者や外交官としての証明書も持たないで行くなんて— ありえない！」

こうして私は、ベオグラードのオーストリア大使館のきれいな建物の中にいるということになったのだった。ここでは、一年前と同様に、苛々とヴィザを待つ大勢の — その大多数は若い人たちだった — の長蛇の列ができていた。「私にはわかりませんが、もしかしたら副領事があなたのお役に立てるかもしれません」と、グラーツ出身の [窓口の] 女性が言った。副領事も何もできなかったが、ともかくも、プリシュティナ [コソボ州の州都] にいる対外貿易派遣員に電話で連絡をとろうとしてくれた。その電話はつながらなかったが、私は、その電話番号を手に入れ、直ちに出発した。コソボで、オーストリアの民間人がビジネスマンたちの世話をするために滞在しているのなら、そこへ行くことは不可能ではないはずだ、と、私は考えたのである。

南セルビアの中心都市ニシュまで240キロメートルだったが、私は、そこへ一時間半で到着した。石油禁輸が丁度終わったばかりであったが、禁輸が解けたことの影響はまだほとんど感じられず、依然として、釣竿のような棒に、石油を詰めた瓶を垂れ下げて、自動車道のガードレールに持たせかけてある光景が見られた。しかし車の往来はゼロに近かった。NATOの爆弾が命中した場所では、ずっと前から、自動車道の少なくとも片側は通行可能に

なるようにされていた。

ニシュで、かつて中欧と近東を結ぶ幹線道路だったその道路を離れ、私は西へ向かった。私が持っていたフライターク・ベルントの大判の道路地図によれば、それは、欧州道路「E752」で、直接コンボ州に向い、プリシュティナとプリズレンへ通じていた。欧州道路という名前にもかかわらず、ヨーロッパを思わせるものはほとんどなかった。ベオグラードの人たちの平均収入 — そもそも収入がある人たちについてだが — は、当地に住む私の話し相手が語ったところによれば、50~70マルクで、それは、月に一度ガソリンを入れるに丁度足りる程度である、とのことであった。しかし、このような奥深い僻地では、人々の収入はおそらくさらにいくらか少ないのであろう。たとえガソリンがあったとしても、それを買える人などほとんどいないのではないだろうか。

プロクプリエ、グラボヴニツァ、ラチャ。ニシュを出て100キロメートル行くと、コンボ州、セルビア人の故郷である、あの州⁽⁴⁾が始まる。車を運転していると、他の車のことなど考慮しないで道路を思うままに自由に疾走することができたらどんなにいいだろうという願いを抱くことが時々あるが、ここはまさにそんな状態だった。だが、ここでは、それはむしろ荒涼としていて息苦しかった。それで私は、孤独な走行のあと、ついにセルビアの国境兵士たちに出会ったとき、「やっと人間に出会えた！たとえ戦車に囲まれていても」と、いくらか安堵したほどだった。

検閲は、冷淡な雰囲気が始まった。私はまたもや彼らの前に、オーストリアのパスポートとドイツの車両ナンバーをつけた車と共に立つことになった。それらは本来、私への憎悪を喚起するものであるはずだという感情を私は依然として持っていた。しかし、短く元気に言った「ドボル ダン」(こんにちは)の挨拶だけで、すべてが再び氷解した。その後は、いつものように、ドイツ語と英語とセルボ・クロアチア語をごちゃまぜにして意思疎通した。私は、セルボ・クロアチア語を発音するときに、この人たちには好感をもたれていないクロアチア語っぽさをあまり出さないように、思わず i と j を省くように気をつけた。三、四人の重装備の兵士たちが私にしょっちゅう冗談を言った。一人が私の車を調べながら、「この車と戦車を交換しよう」と言い、別の一人は、助手席のCDを見つけて、「音楽は好きなんだ」と、車内から叫んだ。私が、それはスペイン語の語学講座だと説明すると、「フラメンコも好きだよ」という言葉が返ってきた。

しかし、彼らの一人は、どうやら私のことを疑っているようだった。「ユー

「ユーゴスラビアにはいつ入国したのか？」 私は、パスポートのスタンプを示した。否、彼が知ろうとしたのは、正確な時刻だったのだ。「ちょうど昼の12時でした。」 私は、このような申し立てが何のためにそんなに重要なのか、あまり想像もできなかったが、彼は、私の答えをもって、砂袋を積み上げて築かれた砦のなかへ入っていった。このような砂の砦は、おそらく、国際的に定着している新しい軍事的な「流行」みたいなものにちがいない。というのは、翌日以降も、これととてもよく似た砦がチェックポイントと呼ばれて、KFORの駐屯地にもあるのを、何度も目にしたからである。それは、砂袋が一つまた一つと積み上げられて正方形のバンガローのように築かれたものであるが、その上かけられた濃緑色の網が、全体としてロマンチックな印象を醸し出している。私自身の軍隊経験からは、そんな「ステキな」ものは、記憶に残っていない。

私を疑っていた男は、その砦から出てきた。「ホテルの証明書を！」と彼は要求した。私は、ノヴィサドのボイボディナ・ホテルの領収書を彼に差し出し、ベオグラードでは個人の家で宿泊した、と付け加えた。彼はまた姿を消した。私は、まだ私のまわりに立っている重装備兵たちに、向こうのコソボではどういことが私を待っているだろうか、UCK [コソボ解放軍] はまだひどいことをやっているのだろうか、と尋ねた。「我々は、コソボで何が起きているのかは、知らない」と、音楽ファンの兵士が説明した。「本当に全くわからないのだ。そこは、われわれの国なのに、われわれはそこへ行くことができないのだ。あなたは問題がない。でももし私がそこへ行けば……」 彼は、顎を前に出し、右手の親指を突き出して喉の前をサッと撫で切るような仕草で、その文章を締めくくった。

他方、例の無愛想な兵士が再び砦から出てきて、なおもたくさんのお話をした。彼は、私の答えに満足してはいないようだった。彼が言うには、私はベオグラードで警察に出頭すべきだった、とのことだった。だが最後には、彼も、私にゴーサインを出した。数分走ると再び、道路の左右に砂袋を積み上げた大きな壁が築かれて、通行が片側ずつ遮断されていた。スラローム運転をしながら行くと、やがて、イギリスの旗がたなびく次のチェックポイントに到着した。実際、プリシュティナ周辺のその地帯は、イギリスの管理地区だったのである。

「書類をどうぞ！」と、一人のイギリス紳士が敬礼しながら私を迎えた。彼は私の書類を、横に立っている平服のかわいい少女に手渡した。「どこへ向かっていかれるのですか」「オラホヴァツです」と、私も張り詰めた声で

答えた。紳士は、問うような目つきで少女の方を見た。おそらくアルバニア人の訓練生だと思われるその少女は、目を大きく見開いてもう一度私を見た。ちょっとためらったあとで、彼女は無言のまま頷き、私の書類を持ってキャンピングカーの中へ入っていった。五分後、すべて完了し、イギリスの戦車に護衛されてまたしばらくスラロームを走ったあとで、平和地帯での自由なドライブに移った。

*オラホヴァツへの走行

道路は、最初のうちは非常によかったが、ただ所々、路面に深い窪みがあるために、車はその都度、急な車線変更を強いられた。数キロ走ったところでもう、交通量がほとんど爆発的といつていいほど膨れ上がった。それらの車の平均的な年代は、ここ数日で出会った車に比べて、少なくとも15年前に遡るものだった。九割以上の車がドイツ製だった。また、五キロメートルごとに真新しいガソリンスタンドができていた。

私は、プリシュティナを左に見て進んでいった。携帯電話を何度もかけたが、対外貿易派遣員にはつながらなかったのだから、暗くなる前にオラホヴァツへ着くようにしようと思った。しかし残念ながら、プリシュティナから先は、前へ進むのがいっそう困難になった。一つには、雨が降り、所々濃霧もたちこめてきたことによるが、その上に、道路が段々ひどくなってきたからである。車は、延々と続く渋滞に巻き込まれたが、それらの車の大群は、多くの町や村では、歩行者よりもゆっくりとしか進めなかった。歩行者たちはまさに列をなして、車道の横または車道上を自動車のあいだを通過して歩いていた。彼らの大部分は若者で、多くは、黒い皮のジャンパーを着ていた。アルバニア人が多産であることについてはよく聞いていたが、いま私はそのことを、単なる決まり文句としてではなく、はっきりとこの目で見てとったのだった。どこも、みすぼらしく見えた。特にこんな天候の時には……道は、泥だらけだった。無数の廃墟が、内戦と78日間に及ぶNATOの空爆の痕を物語っていた。だが、どこもバザールのように賑わっていて、それらの店は、多くはただ売台があるにすぎなかったが、どれも品々がはちきれそうに置かれていた。

腹立たしいことに、私は、自分がどのあたりにいるのかほとんど見当がつかず、二、三の交差点で、ただ勘に頼って進行方向を決めねばならなかった。多くの標識や地名は二言語で記されてはいたものの、判読できるのは、アル

バニア語によるものばかりだった。掲示板の下部に書かれているセルビア語の標識は、例外なく読めないようにされていた。私が持っていた道路地図は、かなり新しいものではあったが、まだこのような新しい状況には対応しておらず、すべてセルビア語でのみ書かれていた。

私にはまだ、当地やそこにいっぱい集まっている人々について、どんな感情もなかった。彼らは大多数、平和に暮らす以外のことは何も望んでいない人たちなのだろうか。経済的な困窮に駆られ、犯罪的な政治家に煽られて、この地をマフィアの土地とみなされるようになってしまったのは、ただ幾人かの少数の人々だけなのだろうか。噂によれば、コソボは、ヨーロッパで最大のヘロイン積み替え地であり、シヨバ代の強要や武器売買や誘拐は日常茶飯事であり、非アルバニア住民は一日たりともそこで安全に暮らせない、しかもこのようなことすべてが、世界中の多くの国々からきている四万人のKFORの兵士や数千人の警察官の目の前で起こっている、とのことだった。

最近一年半のあいだに起こった多くの事件が私の脳裡をよぎった。避難していく人々、炎上する家々、多くの殺害、射撃されたバス…白状すれば、私は、走行中ずっと、胃がもたれて気分がとても悪かった。用心深く車のドアのキーを全部かけ、最初のうちは、どこにも停車する勇気はなかった。

自分がそもそもどこにいるのか、ついにはっきりさせようとして、一軒のガソリンスタンドに寄ったときには、もうすっかり日が暮れていた。幸運にも、そこには、長いあいだスイスで働いていた大変親かな年輩のアルバニア人がいた。「オラホヴァツですって？ 旦那様、きっと、ヲホヴァツのことですね？ オラホヴァツは、セルビアの地名で、もう存在しないのですよ。」

そのとき突然、ブルガリア出身のアメリカ人のことが私の脳裡に浮かんだ。彼はコソボでKFORの仕事をしていたが、一年前、すなわち1999年10月11日、プリシュティナで射殺されたのである。彼は、大勢の人の群れのなかで、一人の人から時刻を尋ねられた。彼は、おそらくブルガリア語で答えたのだろう。彼が不運だったのは、セルビア語とブルガリア語の響きが大変似ていたことである。それで彼はセルビア人と思われ、大勢の人の見ている前で撃たれたのである。殺人者は、人知れず人込みにまぎれて消えた。

私は、自分が非常に軽率だったことに気づいた。けれども、そのガソリンスタンドの主が道を詳しく教えてくれたあとで、最後に遠くまで聞こえるように「グアテン オービヒ（さよなら）」⁽¹⁵⁾と別れの挨拶をしてくれたことで、私は少しほっとした。私はどうやら道を間違えてはおらず、しかもいま一つ新しいことを学んだのだった。私は、今後は、セルボ・クロアチア語は

一語も使わないでおこう、と、強く頭に叩き込んだ。

KFORのドイツ管理区域の中心地であるブリズレンから数キロのところ
で道が分岐し、右手の道はオラホヴァツ、否、ラホヴァツへ向かっていた。
それは裏通りのような道で、通行車両は途端にゼロになった。数キロ進んだ
ところで、KFORのチェックポイントがあったが、残念ながらいまは空に
な^{から}って誰もいなかった。それを過ぎると、ついに、地図にも記載されている
山地に入った。その山脈の末端に私の目的地があるはずだった。しかし、残
念なことに、どこにも村落らしいものは見えず、わずかに認められる家々の
どれにも灯りがついてはいなかった。左側に一軒のガソリンスタンドが現れ、
そこに揺らめく光のなかに、一人の人間が幻のように映し出されていた。私
は、今度もついてきた！その男はすぐに出てきた。彼はかつてドイツで働い
ていたことがあり、格別に親切だった。「あなたがとった道は全く正しいも
のでしたよ。800メートル引き返して、それから左に入れば、その場所に着
けますよ。」ほっとして、私は、言われたとおりにしたが、その道をバック
して3キロ行っても、分かれ道はなかった。あの善人は思い違いをしていた
に違いない、と思って、私は再び元の方向に向かって、山を登っていった。

私は、次のガソリンスタンドで停まった。そこでは、今度も、ガス灯の灯
りのなかに三人の若者の姿が見えた。そのなかの一人が出てきてくれるの
ではないかという期待がかなえられなかったので、私は中へ入っていき、入り
口で「ドイツ語を話せますか」と大きな声で尋ねた。「ラホヴァツへはどう
行ったらいいのでしょうか。」「ラホヴァツ？セルビア語のようだな。そんな
ものは知らないよ」と、足を広げて座っていた陰気なタイプの男たちの一人
がぶつぶつぶやくように答えた。私は何とか努力して冷静を保った。「私
の地図にはオラホヴァツとなっているのだけれど、この地図はきっともう古
いんだね。」「オラホヴァツ？ それはもうずっと前からラホヴェツというん
だよ。オラホヴァツなんて忘れちまいな」結局、まだこのまま二キロ先ま
で行かなければならない、と、かなり無愛想に告げられた。

すぐに私は、この情報が間違っていると感じた、が、どうすればよかった
だろう？ 私は、ゆっくりと、しばしば歩行と同じような速さにまで落として、
そのでこぼこ道をさらに先へ進んだ。だが、5キロ行っても、まだ街ら
しいものは何もなかった。ヘッドライトの上下する光線のなかに見える限り
では、神にも見放されたような荒涼とした山地にいるようだった。突然、
KFORのチェックポイントが現れた。二人の疲れたような兵士が、全然兵
隊らしくない様子で砂袋の壁にもたれていた。「ドイツ語を話せますか」と、

私は、車の窓を開けて尋ねた。彼らはしばらくの間、互いに話し合っていたが、答えは返ってこなかった。私は、まだドイツ管理区にいると確信していたが、“Do you speak english? Parlez vous français? Parlate italiano?”と尋ねてみた。「ドイツ語!」と、一人が退屈そうに答えた。しかし、それが、私がこの二人から引き出した唯一の言葉だった。

私は彼らに説いて、ラホヴェツすなわちオラホヴァツへの道を尋ね、私を助けてくれるようにと強く訴えたが、彼らはただ、このまま先へ進むようにと指し示すだけだった。次の日になって、私は、彼らがロシア人だったことを知った。彼らは、つい最近までチェチェンで戦っていて、コソボでの任務をいわば休暇のようにみなしていたのである。コソボには、KFORにロシア部隊が多くいたが、NATOは彼らに固有の管理区域を与えようとはしなかったため、彼らは、グループに分かれて他の国々の管理区域に配分されていた。そのとき私が身をおいていたのは、ドイツ人の管理下にありながらロシア人によって監督されていた、アルバニア人が住む地域だったのである。このことを先ずは理解しておかなければならない。私は、この二人を気が狂っているか、少なくとも、アルコールかドラッグでいわれているのだと思った。けれども彼らのそばには散弾銃が立てかけてあったので、私は、完全に間違った方向だと知りながら、その道を先へ進んで行った。

当初16時頃にはオラホヴァツに到着したいと思っていたのに、もうすぐ21時になるところで、もう三時間も前から暗くなっていた。その近辺には全くひと気がなく、私の神経も次第にパニックに陥ろうとしていた。どこか林の中で夜を過ごさねばならないことになるのだろうか。さらに10キロ行くと、次のガソリンスタンドが見えてきた。何と幸運なことだろう! 丁度この瞬間に、一台のタクシーがこちらへやってきた。「ラホヴェツ? あとについてきなさい!」 親切な運転手はそう言って、自分の車に飛び乗ってすぐに運転し、タイヤやバンパーが傷むのを気にもとめず、先導してくれた。私が来た道を引き返し、あの奇妙な「ドイツ人たち」のそばも通り過ぎた。

ちょうど私がさきほど立ち寄った二番目のガソリンスタンドのある高地に来たとき、彼は停まり、夜闇のなかでほとんど見えない左折路を指さした。「その道をもう一キロ行くと、目的地ですよ。」 新たな楽観的な気持ちが起こってくると同時に、まだ相変わらず不安な気持ちも抱きながら、私は、その道を下っていった。するとまもなく、家々の輪郭とどんどん増える人々の姿が見えてきた。そのあと、私をとっても興奮させたことが起こった。私はどうやら既に街の真ん中にいるようだったが、突然、私の周りを取り巻くよう

に無数の光が襲ってきたのが、夜の深い闇の中でもはっきりと見てとれた。私はここで待ち受けられていたのだ、と解する以外に、この場面を判断しようがなかった。そしてそれは、よいことであるはずはなかった。実際には、すぐ後でわかったのであるが、それは、何時間も続いた停電がちょうどそのとき終わった瞬間だったのだ。

その直後に、ドイツ人の警官が私の車を停めた。このときほど、私がドイツ人の警官のことを嬉しく思ったことはない。「もちろん、私はドイツ語を話しますよ」と、彼は笑いながら言った。そしてその数分後に、私は、OSZE [全欧州安全協力機構] のセンターの前に車を駐車させ、ハイデイについて尋ねた。彼女が私の前に現れたとき、私は、彼女と初めて会ったにもかかわらず、嬉しさのあまり彼女の首に抱きついた。

*ハイデイ

私は数週間前に休暇先でハイデイの両親と知り合ったのだった。そのとき彼らは私に、何かのついでに、自分たちの娘について、民族学者として以前にもバングラデシュや他の貧困地帯で働いたことがあり、いまはコソボでOSZEの任務を遂行中であると語ったのだった。私はもちろんその話に強く惹きつけられた。ついに、私がコソボの状況について問い合わせることができ、場合によっては当地に訪ねることもできる人が現れたのだ。ハイデイは、電話ではつながらないとのことだったが、二週間後に私は彼女のEメールのアドレスを受け取った。

私は直ちに、彼女に宛てて一連の質問をメールで送った。あとで聞いたところによれば、彼女はインターネットへのアクセスを一週間に一回しかしていなかったとのことで、返事は待たされた。実際、彼女は一週間後にメールで「私はコソボの連絡係としてあなたのお役に立つことができるが、それは、あなたに具体的なプロジェクトと最低二週間の滞在期間がある場合に限ってのことであり、単なる旅行者として二、三日コソボに滞在するというのは、お勧めできない。コソボに入るには、航空機でのみ可能である」と返事してきた。

この返事が届いた時点で既に、私はコソボ行きを自力で試みてみようと思った。それで私は彼女に、二日以内に出発するつもりであると返事をし、もし彼女がこの返事を一週間以内に読んだ場合は、私の携帯電話に連絡してくれるようにと頼んだ。実際私がベオグラードにいたとき、ハイデイか

ら電話が入った。彼女は、オラホヴァツ—あるいは彼女はラホヴェツと言ったのだったろうか—に配備されていること、私が当地まで来ることができたら当地のOSZEセンターで待っていると聞いた。それ以上のことは話せなかったが、それでもう十分だった。

こうしていま、彼女が私の目の前に立っているというわけだった。彼女は、仕事で明け暮れた長い一日を終えて、ちょうどオフィスを出ようとしているところだった。そして、数人のドイツ人の警官と共同で借りている郊外の家に私を招待してくれた。彼女はこの地で、「民主化担当官」として活動している。そう彼女は言い、またそのように彼女の名刺に記されていた。私は、コソポに入ってからここへ到着するまでの自分の冒険的な旅路について語ったが、彼女は穏やかに微笑んでいただけだった。「いま、ここはもうほとんど天国のようなものですよ。この前の冬にいらっしゃっていたら！あの時は、何もなかったのです。電気も水も… 交通の絶えた道路に、何ひとつ動くものはなかったのですよ。数週間、零下20度、時には零下30度にもなったのです。暖房はなく、何も正常に動かなかったのです。私たちがどうやって生き延びられたのか、今ではもうわかりません。」 いまは、巨額の金がコソポにつき込まれており、もうかつての面影はないとのことだった。

私たちは、大きな美しい一軒家にいた。その家の前には、家主の女性—もう私に親切に挨拶してくれていた—がアイヴァル⁽¹⁶⁾用の赤いパブリカの山を作っていた。ハイディは私に、隣室でテレビを見ていた、感じのいい、のっぼのハンブルクの警察官ハイコを紹介した。私たちのテーブルには、たくさんのチーズやソーセージと共に、「カベルネ ソーヴィニヨン」が一瓶あった。ラベルに書かれた奇妙な表記（“Kaberne Sovinjon”）⁽¹⁷⁾を別にすれば、それは、十分にお薦めできるワインである。「おいしい辛口で、喉ごしもまあいける」と、ワイン通なら言うであろう。オラホヴァツの周辺が、葡萄の栽培で知られており、「くろうた鳥の野」⁽¹⁸⁾のワインの大部分は当地の産であることを、ハイディは教えてくれた。

「民主化担当官」とは何をする人をいうのか、私は知りたいと思って尋ねた。そして、彼らの任務とは、差し迫っている選挙に向けて政党や候補者や有権者にその準備をさせることであると知った。数人の同僚と共に、ブリズレン周辺地域の80の町村でこのような仕事を行うことが、彼女に課せられた任務であるとのことである。それと併せて、いわゆる「選挙管理委員」が、2000年10月28日に設定されている選挙の実施と監視にあたる。その日は、10月19日で、選挙戦は頂点に達していた。ハイディの一日の労働時間は、この

ところ12時間から16時間にもなり、週の労働日は7日だった。選挙人名簿の登録や選挙経過と催し物の実施にあたっての無数の規則を、各政党の代表者に、ごく小さな村にまで入り込んで説明し、規則が遵守されたか否かを監視しなければならない。「もしお望みなら、明日11時にOSZEのオフィスに来て、二、三時間、私と行動を共にしてもらってもいいですよ。」

「ここにいる貴方たちって、どんな人たちなんだろう。救援者あるいは解放者でしょうか。」ハイディは、しばし返答をためらった。「私たちは、人々が、お金や仕事について尋ねるための人間なのです。私たちは、どんな問題も解決するよう求められているのです。」「それじゃ、あなた方は、慈善家なのですか。」「いいえ」と、ハイディは否定した。「人々は私たちをそのようなは見えていません。ボスニアに住んだことのある同僚が私に語ってくれたところによれば、何と言ったらいいのか一感謝なんて言葉は問題にならないとしても一承認ということについても、それを当地で感じとれることはないのです。私たちがお金をあげ、それがすぐに彼らの息子たちの車や洋服に使われるとしても、それを淡々と受けとめなければならないのです。この人々にとっては、息子が一番大切なものなのです。」音もなく灯りが消えた。ハイディは蠟燭の用意をすでにしていた。彼女は、「もう一生涯、キャンドルライト・パーティになんて行こうとは思わないわ」と、冗談を言った。「ここには、まだセルビア人はいますか」と私は尋ねた。「ええ、ここには、セルビア人も約500人から700人いますよ。私は明日あなたを彼らのところへ連れていきましょう。ロマも、オラホヴァツの閉ざされた一区域に住んでいます。選挙にはセルビア人は参加しませんが、私たちは、彼らと毎日連絡をとっています。」

ハイディはすでに早朝から忙しく働いていて翌日も7時から仕事を始めねばならなかったにもかかわらず、私たちは、長時間一緒に腰を下ろして話し込んだ。私は、彼女にとっても感銘を受けていた。家主の女性とはアルバニア語で話し—「アルバニア語はもう15年前に勉強したのよ」—、「救援者・シンドローム」と時に呼ばれたりすることもあるような特徴を感じさせるものは微塵もなく、仕事をプロとしてこなすと共にみずから自発的に行動し、言葉を選ぶ際に精確であると同時に心がこもっていた。

★ それ以来私はくたばっている

心地よい部屋で一夜を過ごしたあと、翌朝7時半に目が覚めたとき、ハイ

ディはどうやらもう出かけているようだった。親切な女家主、アドリアナは台所をきれいにし、私に、おいしくてまだ温かいアイヴァルを出してくれた。彼女は、夜通し働いてそれを仕上げたとのことである。実際、家の前のパブリカの山は消えていた。彼女は終始、親しみのこもった微笑を顔に浮かべていたが、他方、強い痛みも訴えた。何度も胸に手を当て、二、三の断片的なドイツ語で、空爆以来、もうまともに呼吸できなくなっているのだと説明した。「ドカーン、ドカーン！ 毎日、毎晩だよ。」 当地に投下された一つ一つの爆弾はもちろん、最短距離で60キロメートルは離れているプリシュティナに落されたものまで聞こえた、とのことだった。だが、オラホヴァツには爆弾は投下されなかった、と、彼女は感謝の眼差しで天を仰いだ、けれども一度、ここから五キロ離れた小さな町、ヴェリカ・ホツァのセルビア人たちが飛行機に向かって銃撃したことがあった、すると、パイロットが飛行機をカーブさせて戻ってきて爆弾を落としていった。「それはもう、凄い爆音だったよ！」 アドリアナは目を丸くし、両手を上に挙げて言った。「それ以来、私はくたばっているの。」

私は街へ行った。街の外側の区域にある「道路」は、我々の国だったらおそらくモータークロスのコースとしても通れないような代物だったが、中心地に入ると問題なく前進できた。人口がおよそ22000人のその町は、非常に活気があり、至るところでハンマーを打ったりセメントを固めたりしていた。ドイツ国旗を掲げた戦車が通り過ぎた。或る家の正面に、その一軒だけで18個のパラボラアンテナが建っていた。

私は喫茶店に入った。誰も私に注意を払わなかった。五人の若い少年が三つのテーブルにつき、大きな窓ガラスを通して通りの賑わいを黙って見ていた。私と同年輩の紳士がその店へ入ってきた。彼が私のことを通りから見ただけで外国人だと気づいたのだと、私は思った。ともかく彼はすぐに私のテーブルにやってきて座り、いきなり、仕事はないかと尋ねた。彼は、技術援護団のもとで通訳として働いていたが、目下のところ仕事はない。五人の子供が家にいるが、彼らが食べるものは全くないとのことだった。

【訳注】

- 1) スラボニア、クライナ：スラボニアは、クロアチア東部のセルビア人多数地域。クライナは、クロアチア西部のセルビア人多数地域。両地域のセルビア人は、クロアチア共和国のツジマン政権の発足後、クロアチア

のユーゴスラビア連邦からの分離・独立の動きが強まったのに伴い、各々「スラボニア・セルビア人自治区」「クライナ・セルビア人自治区」を創設して対抗していたが、91年、両者が合併して「クライナ・セルビア人共和国」を結成した。しかし、95年、クロアチア共和国軍の電撃侵攻作戦により、西スラボニアおよびクライナがクロアチアに武力制圧され、残る東スラボニアも97年に、国連の統制下に、クロアチアの主権下に統合された。なお、本書「*クライナ地方を通して」(原著36-38頁。邦訳は、本稿(1)『熊本県立大学文学部紀要』第10巻第2号、78-80頁)には、91年5月当時のクライナ地方の様子が描かれている。

- 2) クライナのセルビア人リーダー：本稿(4)『熊本県立大学文学部紀要』第13巻(2007年2月)、74頁、参照。
- 3) マーストリヒト条約：1992年2月にオランダのマーストリヒトで調印され、1993年に発効した条約。これにより、EC(欧州共同体)は、原加盟六カ国(ドイツ、フランス、イタリア、ベルギー、オランダ、ルクセンブルグ)に、イギリス、アイルランド、デンマーク、ギリシャ、スペイン、ポルトガルの六カ国を加えた12カ国で、EU(欧州連合)へと拡大された。
- 4) スロベニアとクロアチアの独立の承認：1991年6月スロベニア、クロアチアの両共和国が独立を宣言し、1991年12月ドイツが単独でこれを承認し、92年1月、ECがこの2国の独立を承認した。1992年3月ボスニア・ヘルツェゴビナも独立を宣言し、内戦が勃発した。92年5月、スロベニア、クロアチア、ボスニアの国連加盟が認められた。
- 5) ユーゴスラビアの崩壊：旧ユーゴスラビア連邦を構成していた六つの共和国のうち、スロベニア、クロアチア、マケドニア、ボスニア・ヘルツェゴビナの四共和国が次々と連邦から独立宣言をし、ECや国連から承認されていくなかで、旧ユーゴスラビア連邦は解体し、92年4月、残るセルビアとモンテネグロの両共和国により新たな「ユーゴスラビア連邦」(新ユーゴスラビア連邦)が結成された。しかし国連はこれを認めず、92年9月、新ユーゴは国連から追放された。(なお、本書の刊行後のことになるが、2006年6月、モンテネグロがセルビアとの国家連合を解消したため、ユーゴスラビアという国名も消滅した。)
- 6) 新たに私の家族の一員となった子供たち：著者の伴侶スネジヤナの前夫ネナートとのあいだの子供、アテナ(娘)とペロ(息子)。
- 7) すでに言及したように：本稿(2)『熊本県立大学文学部紀要』第11巻、

76頁参照。

- 8) クロアチアの秋：本書では、この章全体に「クロアチアの冬」という章題がつけられ、特に、独立後の90年代後半のクロアチアの疲弊・荒廃を名指す言葉として使われている（本稿9頁参照）が、それを踏まえて、そのような「冬の時代」に入る前段階という意味で言われた著者独特の表現。同時に、1971年のクロアチア共和国の自治拡大運動が一般に「クロアチアの春」と呼ばれていることをも意識した反語的な表現となっている。
- 9) スレブレニツァ：東ボスニアのセルビア人地帯に囲まれたムスリム人飛び地で、国連保護軍に守られた国連安全地域だったが、1995年7月、セルビア人勢力が突入して陥落し、それと前後してNATOによる空爆も実施された。陥落時のスレブレニツァのムスリム人の被害は欧米のメディアで大きく採り上げられ、「スレブレニツァ」は、セルビア側によるムスリムの受難を象徴する地名となった。
- 10) UCK：英語名KLA、「コソボ解放軍」、武力によるコソボ独立を唱えるアルバニア系武装組織。1994年に創設され、96年に公然化し、97年以降、セルビア警察や治安部隊との衝突が繰り返され、戦闘が拡大していったが、これに対して欧米はセルビア制裁の立場をとり、99年 NATO によるユーゴ空爆を行う。それを経てコソボからユーゴ軍が撤収し、コソボは NATO 主体の KFOR と国連コソボ暫定統治機構の管理下におかれ、UCK は名目上解散したが、同様のアルバニア系武装組織の活動がコソボおよびその周辺で続き、2001年、マケドニアでの武力攻撃に対して NATO 軍が派遣された。
- 11) スティベ・メーシチ：本稿（1）『熊本県立大学文学部紀要』第10巻第2号、76頁参照。
- 12) ミロシェビッチ大統領の失脚：2000年の大統領選挙で、野党連合のボイスラフ・コシュトニツァに敗れ、同時に起こった民衆蜂起により、失脚した。国連の「旧ユーゴ国際刑事法廷」に起訴されていたが、2001年4月、ユーゴ／セルビア警察により逮捕されて、身柄を同法廷のあるオランダのハーグに移され、審理が開始された。（なお本書の刊行後のことになるが）2006年3月12日、審理未了のまま、拘置施設で死去した。本稿（1）の訳注（19）『熊本県立大学文学部紀要』第10巻第2号、88頁参照。
- 13) イブラヒム・ルゴバ：コソボ自治州のアルバニア系住民の指導者。1944

年、同自治州に生まれ、プリシュティナ大学卒業後、パリに留学。作家活動を経て、コソボのアルバニア系住民運動に参加し、89年にコソボ民主同盟の党首となった。コソボ紛争では、U C Kの武装路線に対して、穏健独立派を代表した。(本書以降の経過としては、国連コソボ暫定統治機構の下で発足した自治州議会により、2002年3月自治州大統領に選出され、2004年に再任されたが、2006年1月病死した。)

- 14) セルビア人の故郷である、あの州：セルビア人にとって、コソボは、14世紀にオスマントルコと戦ったセルビア王国の中心地であり、民族の故郷とみなされている。本稿(3)『熊本県立大学文学部紀要』第13巻60頁および訳注(6)(81頁)参照。なお、その後の(本稿校正時点の2008年2月現在までの)経過について記しておく、コソボ自治州はその後も国連暫定統治下にあったが、同州の最終地位確定をめぐる国連安全保障理事会や当事者間の交渉でも結論が出ないまま、2008年2月17日、コソボ自治州は、欧米の支援の下に、セルビア政府の反対を押しきって、一方的に独立を宣言した。
- 15) 「グアテン オービヒ」：スイスなまりのドイツ語。Guten Abend(「こんばんは」。夕方以降の別れの挨拶として「さようなら」の意にも用いられる。ここはその用法)に対応する。
- 16) アイヴァル：パプリカや玉葱やトマトなどを刻み、さまざまな香辛料を入れて漬け込んだ保存食。
- 17) “Kaberne Sovinjon”：正しい表記は、Cabernet Sauvignon。世界で最も名高く、品質のよい赤ワインの一つ。但し、ここでは、「瓶の中身は地元のワインで、ラベルのみカベルネ・ソーヴィニオンとしており、その綴りも間違っている、だが、味は悪くない」という意味である。
- 18) 「くろうた鳥の野」：コソボ特産のワイン名。なお、「コソボ(平原)」という地名には、語源的に「くろうた鳥(の野)」という意味がある。

【訂正】

- *本稿(1)『熊本県立大学文学部紀要』第10巻第2号、75頁43-44行目
誤：「スロベニア」 → 正：「スラボニア」
- *本稿(3)『熊本県立大学文学部紀要』第12巻、131頁11行目
誤：「セルビアの特定の政党を」 → 正：「セルビアを」